

新潟教育研究所

令和3年12月9日発行 第48号

公益財団法人 新潟教育会
新潟教育研究所

〒951-8104

新潟市中央区西大畑町590-3 新潟教育会館
URL <http://kyouikukai.jp>

TEL・FAX 025-222-2971

E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

令和の日本型学校教育の構築に向けて

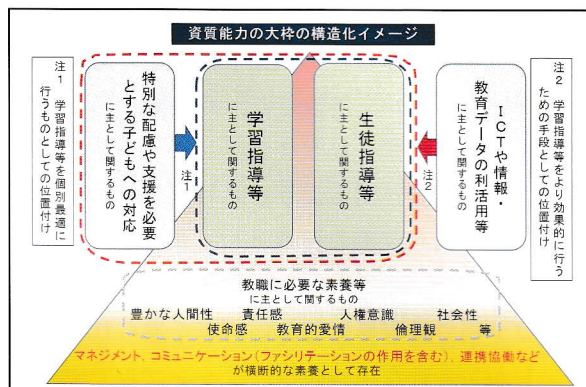
新潟教育会 代表理事

高橋 恒彦



「令和の日本型学校教育」の構築を目指す中教審答申のキーワードは「個別最適な学び」と「協働的な学び」である。本県では、「協働的な学び」において、これまで授業に交流・検討を適切に位置付け、話し合いや学び合いによって一人一人の学びを深めてきた。今後は、ICTの活用等によるさらなる学びの深化が期待される。

一方、人との関わりを苦手とするなど、子どもの実態が多様化するとともに、社会の変化によって教育課題が複雑化する状況において、個別最適な学びを保障していく必要性が高まっている。現在、中教審では「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会が開催されている。その部会資料では、教師に求められる資質能力を下图のように示し、「特別な配慮や支援を必要とする子どもへの対応」を「学習指導等」「生徒指導等」を個別最適に行うもの、として位置付けている。



学習指導や生徒指導は、本来、個に応じて行っていくものであるが、個が多様化する状況において、個々の学びをどこまで最適化できるかについ

ては、教師の資質能力に大きく左右される。とりわけ、特別な配慮や支援を必要とする子どもへの対応の力を高めていくことは、指導の個別化や学習の個性化を図る重要な鍵となる。

特別な配慮や支援を必要とする子どもへの対応の基本は、子ども一人一人の困り感に寄り添い、その子なりのよさや可能性を認めて自己有用感を高め、主体的に自己を高めていくことができるように支援を行うことにある。その際、学習効果が高まるように一人一人の状況に応じた合理的配慮が必要とされる。ICTの利活用も合理的配慮として極めて有効であり、読むことが苦手な子どもには「音声読み上げ機能」を活用する実践などがある。小中学校においては、不登校児童生徒が増加しており、平成25年以降、増加の傾向は顕著である。また、特別支援学校・学級の在籍数の増加も続いている。こうした現状も踏まえ、誰一人取り残されることなく全ての子どもたちの可能性を引き出すためにも、個別最適な学びの保障とその精度を高めていくことが急務である。

さらに、部会資料にはマネジメント、ファシリテーションを含むコミュニケーション、連携協働などを横断的素養として挙げた。変化が著しい現状においては、教師一人で課題解決を図るのではなく、チームとして協働していくことが不可欠となる。学校現場における協働性・心理的安全性を確保し、校内研修での学び合いや直面する教育課題の解決に向けて、教職員同士のプラスの相互作用を促す文化の醸成も一層重要となっている。

教育相談は 「雰囲気」がすべて

新潟教育研究所 教育アドバイザー

木澤 弘



はじめに

退職後、スクールカウンセラーになりました。立場を変えて学校に入って、今まで以上によく分かったことがあります。先生方が真摯に子どもたちと向き合っていることです。一方、カウンセリングの場では、先生方のその姿が子どもたちや保護者に理解されてない話を聴いたりします。理解されない原因の一つに先生方の話の聴き方があるようです。ここでは、話を聴く援助である教育相談に絞って、私が大事だと思っていることをお伝えしてみたいと思います。

1 教育相談で心がけたい「心」

まず大前提です。教育相談が必要なとき、子どもたちや保護者の心は既に傷ついています。心の傷はうずいていて、癒しを必要としています。この想像力をもつことを常に心がけましょう。

癒しはどのようにして起こるのでしょうか。それは退行で起こります。お祭り、花火、懐メロ、居酒屋など、心がほっとする場面では、退行が起こっています。人は童心に帰って心を癒します。子どもなら赤ちゃん返りです。退行が、すべての人に備わっている自然治癒力を活性化します。退行が認められ抱えられて、人は安心感の中で自分自身を癒す体験をします。教育相談場面では、退行を保証し温かく抱えることを心がけましょう。

霊長類最強と言われた女子レスリングの吉田沙保里さんがオリンピックで負けたとき、「お父さんに怒られる」と言って幼児のように泣きました。退行です。「大丈夫。よくがんばったよ」とお母さんは愛娘の退行を抱えました。その後吉田さんは見事に立ち直りました。このイメージです。

ここで大事になるのが受容・共感です。ただし、受容・共感しなければいけないという聴き方は、間違いです。この聴き方は自分を縛り心をかたくなにします。正しい聴き方は、自分の心に受容や

共感が体験として生じるように聴くことです。そのため、話を丁寧に聴くことを心がけましょう。

以上のようなことを心がけていくと、相手に寄り添う「雰囲気」が生まれます。この「雰囲気」が何よりも大切です。大切どころか、「雰囲気」がすべてです。なぜなら、いのちは言葉以前の「雰囲気」に、より敏感だからです。

2 よい「雰囲気」を作る具体的な「技」

相談場面でよい「雰囲気」を作るために、私が日ごろ実践していることをいくつか紹介します。

① 非言語のペース合わせをする

表情、身振り手振り、姿勢、視線、呼吸、声の調子などを感じ取って、相手のペースに合わせることで一体感を醸成します。

② 心を閉ざすコミュニケーションを使わない

心を閉ざすコミュニケーションとは、命令・説教・脅し・合わない提案・一方的な解釈・否定・非難・形だけの同意・ごまかし・根掘り葉掘りの質問・余計な同情、などです。

③ 不適切な行為は受容しないが、そうってしまった気持ちのプロセスを受容する

プロセスを否定しないで丁寧に聴いていくと、共感が生じ、受容しやすくなります。

④ 相手のよいところを引き立てながら聴く

これを意識することで、相手は問題のある人だという決めつけから解放され、問題解決の可能性をキャッチしやすくなります。

⑤ 自然な笑顔が出るような終わり方をする

相談の評価・改善の指標としても役立ちます。

おわりに

コロナ禍で教育界は難しい対応を迫られています。しかし、教育相談の援助はシンプルです。いのちの自然治癒力を信頼し、それを活性化するためによい「雰囲気」を作って話を聴くこと。教師の心と技として心に留めていただければ幸いです。

昭和

新潟教育研究所 研究員

宮川由美子



はじめに

機会があったら「埼玉県川越市」を旅したいと思いつつ、このような状況下になってしまった。テレビ等で紹介されているので、あの昭和の街並みを思い浮かべる方も多いのではないだろうか。木造建ての瓦屋根、引き戸に縁側。時の鐘櫓が唯一の高い建物。私たち世代には珍しくもないものが、今、若者世代に人気らしい。

1 昭和の子どもたち

週一回学習ボランティアに行っている学校の5年生の音楽の時間。コロナ禍、鍵盤ハーモニカの代わりにiPadを使っている。「先生が小学生だった頃、iPadなんて無かったのにねえ。」「えーっ!」「スマホも?」「ゲーム機は?」などと、しばらくざわめきが止まらなかった。

スマホどころか、短くなった鉛筆はキャップをつけて最後まで使い切り、漢字練習は広告用紙の裏が白い物を使った。私が6年間愛用した筆入れは、ヒビが入った割れ目に母が赤い糸で繕ったバツテン模様があった。それらは特別なことではなく、どの子にとっても当たり前のことだった。物が無くても足りなくても、少々欠けていても汚くても「いじめ」に繋がることなどなかった。我が家は弟と二人だったが、どの家も兄弟姉妹が多く「いっばひとからげ」の存在だった。子どもたちの声は路地を飛び交い、夕方「ご飯だよ～」と呼ばれるまで遊び呆けた。

ノーベル物理学賞を受賞した真鍋さんの話に「好奇心」というワードがしきりに登場するが、まさに、好奇心の塊だった昭和の子どもたち。

2 昭和の先生たち

夏休みのグラウンド、大勢の子どもたちが眼い目をこすりながらのラジオ体操。ラジオからの音楽に合わせるのだが、放送室からその音源を流してくれるのは、前夜宿直の男先生だった。水やり当番に当たっている日は、午前中にもう一度学校へ行く。教務室で机に向かって書き物をしている

のは女先生だった。そんな先生方は、どこかほんわかとしていて、普段なら言えないため口をきいても笑って受け止めてくれた。

先生方は勉強でも運動でも、できたことは褒め、できないことは厳しく指導した。足の速い子はヒーローだったし、勉強のできる子は尊敬の的だった。手を繋いで一緒にゴールなんてあり得なかったし考えもしなかった。私を含め、できない子もできない子なりの「何か」をもって存在感があった。先生方からの変な平等感や甘やかしが無かったことを、今更ながらありがたいと思っている。だから、躓きにも挫折にも、悔しい思いはしたが転んだままではなかった。「昭和の日本型学校教育」の真っ只中、先生方の情熱の焦点はどこにあったのだろう。

3 昭和の家庭

祖父母に未婚の叔母が三人、両親と私と弟。大人数の我が家だった。母は二十歳で嫁ぎ、叔母たちのお弁当を作ったという（娘の弁当作りは今も続く）。米屋という商売屋であったので、朝から晩まで働きづめの大人たちを横目に育った。隣は「いろはや」という自転車屋さん。自転車も売れば修理もするというお店。そこのおばさんが天下一品の世話好き。町内子供会からお祭りの仮装行列まで、小柄な身体で仕切っていた。このおばさんだけでなく、近所の大人たちからは何くれと世話をされたし叱られもした。町内旅行はバスを一台を借り切ったの海水浴。楽しそうな母の様子は子供心にも嬉しかった。

おわりに

東京オリンピックが世間を賑わせた令和3年。昭和39年にも東京オリンピックが開催された。この年、新潟は地震という大きな災害にも遭っている。私は小学校4年生だった。学校での避難訓練の折り、「新潟地震」という災害を実感できない世代の方が多くなったと実感した時から、昭和という時代は遙か遠くになっていった。

第13回教師力アップ講座

期日 令和3年7月25日(土)

会場 新潟教育会館

～受講者の声から～

第1講座

「特別な支援を必要とする子がいる
学級経営・学習指導 その2」
～UDLの考え方を取り入れて～

講師 加茂市立加茂西小学校 校長
古田島 恵津子 様



- ◆ 自分のクラスには、ここが足りない、もっとこうしたいなどと勇気が湧いてきたしワクワクしてきた。子どもたちが「どうしたら学ぶか」は教師の準備や覚悟が大切なのだと改めて実感した。
- ◆ CASTの資料を紹介していただき、日本だけでなく世界の教育が大きな転換期であることを痛感した。子どもに努力を強いるのではなく私自身が良い学習者を育てられるよう努力したい。
- ◆ 通常学級の先生方から、支援を要する児童についての授業やかかわり方を相談されることがあるので、今回学んだことを生かして「子どものために何ができるか」を一緒に考えていきたい。

第2講座

「ICT教育に求められていること」
～情報活用能力の育成の実現に向けて～

講師 新潟大学教職支援センター 特任教授
高橋 恒彦 様

- ◆ 「令和の日本型学校教育」こそが「核」だということがよく分かった。
- ◆ ギガスクール構想がどんどん進む中、ただただ「使わなければ」と焦っていた。この研修で、あらためて「子どもたちがICTを活用する意義」について確認することができた。また、ロイロノートを実際にやってみて利点分かった。
- ◆ 実際に活用していないので、とてもよい刺激になったし大きな壁も感じた。教員の年齢、ICT活用能力の差の大きさ、加えてICT活用のための研修時間もなかなか設定できない現実、働き方改革超勤削減の流れの中で、教師のICT活用力、授業展開の発想力転換を進めることが大きな課題である。



教育アドバイザーリストについて

今年度、新たに教育アドバイザーとして登録いただいた13名の皆さんへの「教育アドバイザー説明会」を、10月24日(日)に実施しました。皆さんのこれまで培われたお力を情報交換し、今後のアドバイザー活動の充実が予想されるひとときとなりました。この13名を含め、計120名のアドバイザーの皆さんが、様々な面から教育現場のお手伝いをさせていただきます。

なお、昨年度から「個人情報保護」のため、教育アドバイザーの住所と電話番号をリストから削除しております。活用につきましては、お気軽に新潟教育会館にお問い合わせください。また、リモートによる教育アドバイザーの活用もスタートしていますので、こちらも、お気軽にお問い合わせください。